

# 協議会ニュース

64号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1997. 8

’97身近な生きもの調査  
今年のテーマは“ツバメの巣”

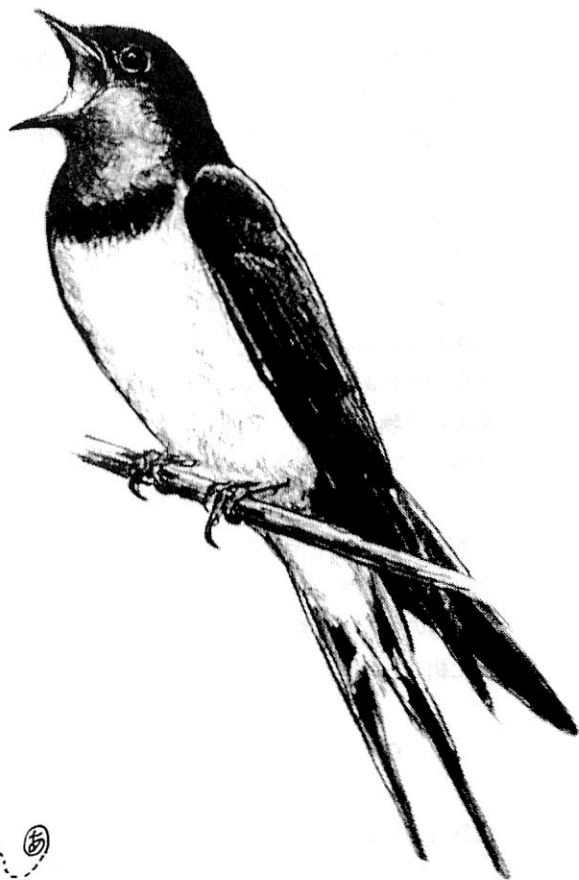
虹ヶ丘の友人がゴシアカ  
ツバメが巣をかけていると  
教えてくれた。

5月のある朝調査に出掛けた。  
巣は4階の踊り場にあった。  
他の階にもあり、数羽が飛び  
交っていた。記録をとって帰って  
10日過ぎた頃、大変! スズメに  
巣を乗っ取られ卵も落されて  
しまった…で万事休す。

市内では珍しいと巣立ちを楽し  
みにしていたのに、やむなく調査  
もストップ。

※家にあった資料を調べていたら、

「せっかく作った巣を提供してしまう  
お人好し」と同じ内容の記事が  
あった。それにしても厳しいですね。



# 自然との共生

前回の機関誌（63号）で募集しました『自然なにかとアンケート』の第3回は「自然との共生」でした。愛知万博の開催が決定し、自然との共生がますます注目される中、私たちは「自然との共生」について、真剣に考えていく課題のひとつに思えます。

「自然との共生」を考える場合、最も大切なことは、アンケートの意見にもありますように「自然とは生きているものである」から出発することと思われます。生きているものは生活しているのです。その意味で動物園の熊は、熊ではありません。生きて生活している熊とともに人間が共にあることが大切と思われます。また、個々の生物だけでなく自然そのものも全体として生きているのです。

そして、自然との共生という課題を通じて、人がどのように生きるのが人らしいのかという問題にも直面することと思われます。

4名の方からご意見をいただきましたので、次に紹介します。

② ② ② ② ②

## 自然との共生について

神戸 敦（東三河支部）

共生とは、自然にとっても人間にとっても、共に得るものがなくてはならない。しかし、今は人間が強くなりすぎてしまったので、何の規制（マナーも含む）もなしに自然に踏み込んでいくことは自然破壊そのものになっている。自然との共生のためには、自然のバランスを崩さないようにする自己規制が人間側に必要である。その啓発活動が我々の活動と言える。ただ、必要以上の規制は望むところではないが・・・

## アシダカグモと共生

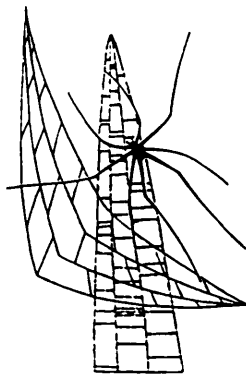
相羽 福松（知多支部）

ある夏の晩、「きゃー、壁に大きな蜘蛛がいるよ」と、突然、妻の悲鳴が聞こえました。私が見るとアシダカグモでした。夜になると、私の家には時々アシダカグモが出てくるのです。全長10㎝以上あって、毛の生えた長い足を8本も広げ、居間の壁をゆっくりと登って行きます。不気味な感じがしますから、驚くのも当然でしょう。

でも、けっして殺すようなことはせず、私はそっと見守り、このアシダカグモを大切にしています。そっとしておけば、そのうちに何処かへ行ってしまい見えなくなってしまう。この蜘蛛は夜行性で、ゴキブリや他の害虫を食べる益虫です。この影響でしょうか、私の家はゴキブリが少ないのです。

先日も、天井裏に上がっていった時のことです。梁にびったりとつき全く動かない、大小3匹のアシダカグモがいました。親子でしょうか。私は一瞬びっくりしましたが、そーっと、静かに立ち去りました。

私の家はアシダカグモに守られているのです。私の家はクモと共生しているのです。怖がらず、憎まず、仲良く付き合っていくことが大切で、自然と共生していく第一歩と思っています。



### 自然との共生について

多和田 政彦 (名古屋支部)

私にとって「自然」とは、私達を取巻く「環境（自然環境）」であります。そして、「自然との共生」とは、「自然環境との共生」であります。

私達を取巻く自然環境には、ヒトを始めとする様々な動物、多様な植物、そして、水や空気等の無生物があります。これらのものとの共生を図るわけではありますが、この中でも、動物のなかの「ヒト」との共生が重要であると思います。なぜならば、これが実現しなければ、ヒト以外の動物や、植物、無生物との共生は図れないからです。例えば、「ヒトとの共生」が図れず戦争になれば、自然環境は破壊され、多くの死傷した動物や植物、多くの有害物質を含んだ空気や水が私達の周りに満ち溢れ、これらのものとの共生は出来なくなるからです。

しかし、「自然との共生」と称し、ヒトとの共生を忘れ、ヒトを敵にしている場合があるように思います。自分の利益しか考えない共生の図れないヒトもいるかもしれないが、図ろうとすれば図れるヒトもいると思います。ヒトは必ずしも敵ではありません。

また、「自然との共生」を図る上で、「生態学」や「動物行動学」を学習される方が多いように感じられます。しかし、「ヒトとの共生」を図るには、これらの学習よりも「行動分析」を始めとする心理学を学習の方がよいと思います。ヒト以外の動物の行動よりも、ヒトの行動を学習の方が「自然との共生」を図るのに必要です。(K. Lorenzの著書だけでなく、B. F. Skinnerの著書も読んでみたらと思います。)



### 「自然との共生」とは

堀田 守 (名古屋支部)

「自然との共生」という言葉を聞いて何を感じるかとの意見をとのこと。私的意見として感じていることを述べさせていただきます。

まず、「自然」という言葉の定義は何ぞやを考えてみると、

自然とは、生きとし生けるものの「命」そのものであり、生命を維持させる物質的、事象的な



こと全てを含む事が「自然」の定義であり、つかまえておけない大きな言葉だと思います。ところが、現在の世の中は、人間中心主義で世界が動いています。人間的価値観での見方をすると、「自然」は人間のためにある。故に生きてゆくために、経済価値を優先とし、環境破壊をして自然を変えてゆかなければ・・・という図式になっていると思われます。よく自然観察会で、「人間も自然の生態系の一員です。動物・植物・昆虫の身になって自然を見てみましょう」と言いますが、これも人間が自然を支配しているといった前提にたっているのでは？と最近思う事があります。人は、自然観に対する視点、観点、置かれている立場、自然環境に対して強く感じていることなどの違いから、それぞれの自然の定義が異なっていて当たり前と思うのです。

我々指導員の立場での「自然」といえば、あらゆる自然環境の中で、豊かな生態系を良い状態に保つためにどうすればよいか？がテーマではないかと思っています。

結論として「自然との共生」とは、自然界のバランスを崩さずに生きること、人間だけが生きる権利を行使しないこと。生きる権利を行使するのであれば、「自然との共生」はあり得ないと思うのであります。

## 岐阜舟伏山の観察と面の木峠ブナ林を訪ねて

朱雀英八郎（名古屋支部）

中部の山々（東海財団発行）を見て

（本店の受付でもらえる）

登山ガイドのコースやタイムの説明でなく山の自然観察として佐藤さんから会員が書いており、よくまとめている。場所別にすると中味が同じようになるのを避け特色のある所をとりあげてるのがいい。長野県の高山のほか、愛知2カ所、三重では藤原岳もある。岐阜県では大白川から白山と夜しゃが池、舟伏山がある。

♡ ♡ ♡ ♡ ♡

### 岐阜舟伏山の観察（1040m）

どこか自然の豊かな近くの山をとさっそく舟伏山へ6月出かけた。山のある美山町は岐阜市の西北で根尾村への国道から入る。山は路からも舟を伏せたように見える。神崎から林道を詰めて「あいの森」まで車で入り、東コースから登る。

山の下部は植林だが頂上近くは広葉樹で山野草が豊富である。まずはシロモジ、アジサイ類、コナスビ、クルマバハグマなどあり、遠くにマタタビが花をつけ白い葉を見せている。6月も終わりで春の花が少なくなった頃だが、ミズキ、キブシもありエゴノキは花が残っていた。

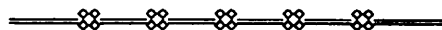
尾根道に出ると神崎からの道と合流するが広葉樹林になり林床にヒトリシズカ、ヤブレガサ（多い）、イチゴ類など多くなる。マツカゼソウ、バイケイソウを見る。グミを試食すると木の葉越しにカモシカに直面して感激。道脇にカキノハグサ、エビラフジにも初めて会い感激。雨の後でカギンリョウソウもあちこちに出てた。かつては海底でサンゴがあったとか石灰岩でコクサギも多い。ヤマトウバナ、エイザンスミレの葉も見つけた。

頂上はなだらかでブナ林が主でヨツバヒヨド

リ、ルイヨウボタンなど山地性の野草も目立ちワラビも出ていて思わぬ収穫となった。

戻りは西コースをたどる。ミツバカエデ、アワフキ、シラキの花を見つけ、茎を折ると白い汁がでるのを初めて確かめた。植林帯を下り流れに出るとヤブタバコ、サワギクもあった。この山は頂上が舟を伏せたようで山腹が広く植物層生が豊かなのがいい。ヒグラシの鳴き声を聞き、ホトトギス、オオルリの声をあとにし、ヤマシャクヤクは見つけなかったが満足して帰った。ツリフネなども多く秋が楽しみだ。

付：ヤマヒルに足をやられ、家に帰っても血が出てたのにはびっくり（同行山仲間二人、植物草本の記載は多いものに限った。）



### 面の木峠ブナ林を訪ねて（高度1000ある）

6月15日青年たちと出かけた。9時本郷駅分乗して出発。10時過ぎ面の木駐車場に着く。途中緑化センターに寄る。伊勢神トイレ休憩。天気曇りで雨ばらついたが晴れ間も出てよかった。

コース 園地、尾根、天狗棚展望経路、尾根をブナ原生林へ、分岐下り、車道から戻る。何人かは稲武野外センタのコースをまわり園地へ

園地の観察 タンナサワフタギ、アブラチャン、ヤマボウシ、リンドウ、マツムシソウ、ミズナラとブナの特徴を話す

天狗棚への道（野草）に目を向ける

ホトトギス、ナルコユリ、カワチブシ、ショウマ、モミジカサ、マムシグサ、（樹木）コクサギにおいを嗅ぐ、ヒトリシズカ、ウスギヨウラク、バイカツツジなど、（名札）カエデ類

天狗棚 ササユリとイチヤクソウ、前来たとき  
あった、また会えてよかった。

ベニドウダン、オオカメノキ、ネジキ  
など20種ほどある。

尾根道 両側の違い（見つけたもの）平野部と  
の違い

ブナの大木の説明、何年ものか、太平  
洋側で育つか。

ササ（スズタケ）の中にギンリョウソ  
ウ（寄生植物で緑がない）を探し見つけ  
た。帰り道サワグルミ、ミズキ、ニワト  
コ、シデなどの木を見て茂みの中にモリ  
アオガエルの産卵塊を見つける。水たまり  
の上に生み、入梅時にかえった幼生が  
下に落ちる。初めて見た人が多く感激。

野鳥さえずり ホトトギス、ツツドリ、オオル  
リ、コマドリ、ヒガラ、ウグイス、ツバ  
メ

昆虫 スジグロチョウ、ヒメハンミョウ

帰りに毎月来てる北岡グループと会う。40  
以上かよく来てるが年配層が多い。我々は中学  
生含め若かった。

野外観察の魅力は何か。何が楽しいか。

名前を知るのもいいが名前だけでは味気ない。  
10種程度特徴あるものを説明にとどめたい。  
知識だけでなく生きものとの出会い、生きる姿  
に感動を伝えたい。生きものは四季折々の自然、  
地形高度気温などの違いに適応して多様な姿を  
見せてくれる。

今の子供は外で遊ばない、遊べない。親も同  
様。五感で知る。楽しむ。クイズ。野草を食べ  
る。クラフト。ロープワークなど体で体験する  
ことがいい。



## ヒノキ (ヒノキ科)

太田 順造 (名古屋支部)

火の木の意。大和草本によると「これを  
錐にてもめば火を生ずる。故に火の木と云  
う」とある。昔の人がこの木をこすり合わ  
せて火をとったことによると云う説が一番  
有力である。

伊勢神宮等々古式にのっとって行われる  
儀式には今でもヒノキを発火用材として用  
いられている。

## マツ (マツ科)

“待つ”説は冬になって霜や雪をまっても何の変化も起こらないから“マツ”と云ったとか。

“保つ”説は樹齢が長く、タモツ→モツが  
転じて“マツ”になったとか。

後の葉が生じるのを待って、前の葉が落  
ちることから待つので松を解字すると

(意符) 木=木

(音符) 公=とがった針のようなものの  
意。針状の葉を持つ木。

“間統” (マツ)

ツはつづめる=統べる (代々受け継がれ  
〜続きになっているもの)

(意味) =幾久しく栄える常盤木 (松) の  
意。(日本語の誕生から)

## フジ (マメ科)

フジの旧仮名はフヂ。長い花房が風に吹  
かれて動き、やがてその花が散るから「吹  
き散る」が縮まってフチがフヂになり、今  
ではフジと書くようになった。フジの示種  
名はfloribunda, は名の数が多いと云う意  
のラテン語の形容詞。フジの花房に花がた  
くさんぶら下がっている姿を植物学上総状  
花序というが、平たくフジ咲きと形容もさ  
れ、花の色も藤色というほど…。

人間にも左巻きがあるようにフジの蔓に  
も左巻き右巻きがあって、通常フジと云わ  
れるものが右巻き、ヤマフジは左巻き、植  
物も左右をちゃんとわきまえているようだ。

## 『私の環境への思い』

金岡 慎太郎（西三河支部）

私は自然が好きです。だからいつも自然を感じていたい、季節の移り変わりを目に映るものや耳に聞こえるものから今までがそうであったようにこれからもそうであってほしい、と願っています。

特にここ数年の間に、地球規模の環境問題についての話題が盛んに報じられ自然が失われつつありますが、私の記憶をさかのぼってみると、小さい頃は、高度成長期の真っ直中にあり「環境の保護・保全」という類の言葉は聞いたことがありませんでした。

昭和48年頃でしたか環境庁の広報で工場や建設作業の騒音を聞いた女の子が「うるさ〜い」と叫ぶ騒音防止のCMがテレビで流れていた



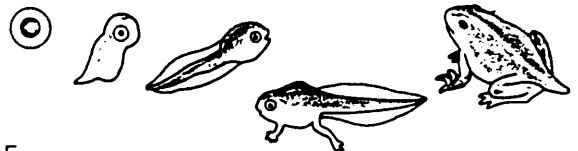
のを微かに覚えています。また、学校での公害学習、そして、現在の環境問題と記憶に刻み込まれてきました。このような状況下の中、私の好きな自然は一体どうなってしまうのでしょうか。

現在の私の環境観は、今ある自然環境の状態を維持し、これからの子供たちに引き継ぎたいということです。それは小さい頃に知らず知らずのうちに母と一緒に、身近な生き物などの自然に触れ合い、自然のよさを母から教えてもらったものだと思っています。その頃は、「自然」という言葉など何も考えず、近くの池に入りザリガニやメダカを、また、公園や神社に行ってセミを捕まえたりして遊んでいました。時には、母に連れられて春や秋を見つけに行ったりもしました。特別な経験をしたわけでもないこのことが、現在の私の環境に関心を寄せる要素になったことだと思います。

でもなぜ、ここまで「環境・環境」と騒ぎだてるのでしょうか。当然のことながら人を始めとして多くの生き物が生活できなくなる未来がうかがえるからでしょうか。私たち人が何気ない生活のなかで無駄と分かっていながら無駄と思わずたくさんエネルギーを使いながらどんどん物を作り、そして消費し、物質社会の中で裕福を勘違いしながらい生活していく。表面だけで目先だけで生活し、本来あるべき人という心を失っているようにも思います。豊かになり過ぎたと感じている物質社会で、このままさらに物質的な欲求を求め、楽な生活を続けて行けば環境がどのようになるかは言わずともわかることだと思います。

そのような思いの中で、環境教育というものを考えてみると、学校の教育課程では、文部省で「環境教育を重要な柱」として考え、一科目だけで学ぶことでせずに学校教育の全体計画に位置付けて教科・領域の枠を越えた総合的な指導が必要とされ、体験活動を通して環境の保全やより良い環境の創造のために実践する態度を育てる指導が求められています。

家庭においてははどうでしょう。「子供」においては、ものの大切さや命の貴さ・人との接し方などを社会における個人レベルの位置付けを日常生活の中で両親やまわりの大人から教えられる。また、「大人」においては、日常生活が環境へどの程度負荷を与えているかを一人ひとりが認識して負荷の軽減を図るための知識や行動の方法を学び実践する必要があると思います。



行政においてはどうでしょう。子供から大人まで市民のみなさんに環境問題について理解と認識を深め、環境にやさしい行動へ結び付けてもらう必要があります。それぞれの担当部局でいろいろな普及啓発が行われておりますが、行政が実施するものはそのきっかけ作りにしかすぎず、市民のみなさんが主体となって活動をしなければならないものが多いのが現状です。当然行政が受け身として立っているだけではなく何かをリードしていく必要はあります。

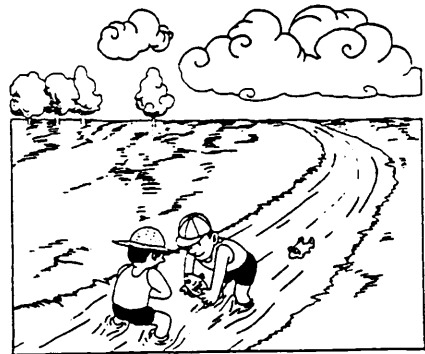
現在私は、たまたま行政で環境教育に関する仕事に従事しております。私の職場「名古屋市環境学習センター“エコパルなごや”」では、市民のみなさんに現在の環境問題を理解してもらい、考え、環境にやさしい行動へ結び付けてもらえるように、また、20年・30年後においてもより良い環境であるように努力しています。職場を簡単に紹介しますと、パソコンを使った展示施設と環境講座などの事業を実施しております。展示施設は、小中学生を対象に考えられており、7つの地球環境問題をテーマとしたコーナー、ロールプレイングゲーム（隠れている生き物を探す）で身近な環境を見つめ直すコーナー、名古屋市内の大気・水質の観測状況や図書・ビデオの検索ができるコーナー、環境にやさしい行動を考えるきっかけ作りのワークショップコーナーがあります。また、シアターではバーチャルリアリティを使ったミミズがいなくなったもしもの世界を映像とパソコンを使いながら考える「たとえ地の中・森の中」（30分上映）、心理学を応用した「環境仲良し度チェック」（15分上演）の2つのソフトがあります。エコパルなごやは市内の中心部にあり、大都市で環境を学ぶ方法の一つとして市内外から多くの方に利用していただいております。

このような施設で働いている私自身が中心に考えたいのがやはり子供です。子供たちの環境教育を実践するうえで、子供たちに実際に自然に触れさせることが一番良いと思いますが、名

古屋市内ではごく限られた場所でしか触れ合うことはできません。エコパルなごやに来る子供たちや事業に参加する子供たちにとって、環境を学ぶ一つの切り口として、環境を考えるきっかけとなり、環境にやさしい行動に結び付き、将来大人になった時に環境を守る力を発揮してもらえればと思っています。

ただ子供たちはまだそのひもを解くための知恵が備わっていません。私や私たち大人は子供たちに何ができるのか、そして、子供たちのために何を残してあげられるのか。このことは、大人が今を大切に考え、子供たちをリードしなければならないことであり、そして、リードしてきた結果私たちも子供たちと共により良い環境に触れることができると思っています。私が子供の頃いろいろな自然に触れ合っていた時のようにこれから子供たちにもそれを共有してもらいたいという思いがあります。

私は自然が好きです。私だけでなくすべての人が心の底では自然のよさを分かっているはずですが、ただ、それに気付くきっかけがないだけでまだ気付かない子供たちとその保護者にも一緒に気付けてもらいたい。自然観察は環境を守る方法の一つですが、大きな要素であることは間違いなく自然観察指導員の役割は非常に大きいと感じています。これからも私なりに自然を守るため、環境を守るため努力していきたいと思う。



# 地下水はだれのものか

近 藤 盛 英 (名古屋支部)

「あさがおに つるべとられて もらいみず」  
釣瓶を使った井戸など、今ではすっかり見ることができませんし、  
子供の頃田舎へ行くと、  
ガチャンガチャンと押し  
した手押しポンプも見  
れなくなりました。



現在ではほとんどの  
家庭で蛇口をひねると、  
いつでも好きなだけ水を得ることができます。  
重労働であった水汲みも上水道がそれだけ普及  
して容易になったということでしょうが、その  
せいかどうか、私たちは地下水に対する関心が  
薄れていったような気がします。

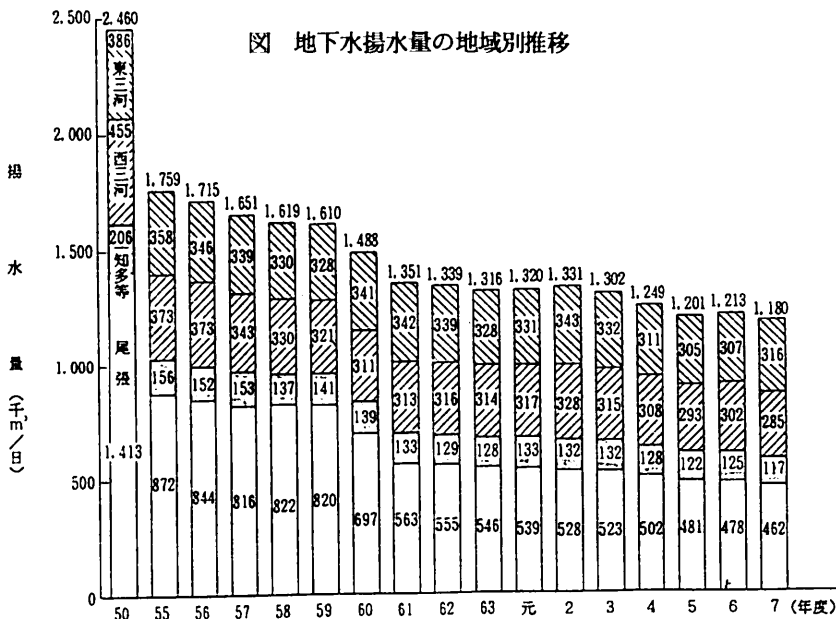
地下水に係る環境として、地盤沈下と地下水  
汚染の問題があります。

## 【地下水採取と地盤沈下】

地盤沈下の起きる仕組みは、帯水層（砂層）から地下水を過剰に汲み上げることによって、帯水層の水圧が低下（地下水位の低下）し、不透水層（粘土層）から水が絞り出され、粘土層が収縮することによると言われています。

愛知県（名古屋市を含む）では、毎年水準点の測量を行い、地盤沈下の監視を行っています。が、東海3県にまたがる濃尾平野地域では過去に1,200km<sup>2</sup>が沈下しました。昭和36年以降34年間の累積沈下量は、三重県長島町において約160cmに達しています。

県下では、尾張地域の南西部地域において地盤沈下がみられ、十四山村大字神戸新田に設置されている水準点では昭和38年から平成7年までの32年間で150cmの累積沈下がありました。



(注) 集計対象は、名古屋市及び三河山間部を除く73市町村  
尾張……規制区域33市町村  
知多等……尾張規制区域外16市町  
(資料) 環境部調べ



名古屋市でも、港区新茶屋四丁目の水準点は昭和36年から平成7年度までに131cmの累積沈下がありました。

また、西三河地域においても吉良町大字吉田字忠四郎前に設置されている水準点では昭和50年から平成7年までの20年間に37cmの沈下がありました。

平成7年度は名古屋市南部において、年間1cm以上2未満の沈下域が3.0km<sup>2</sup> 現れましたが、その他の地域では年間1cm以上の沈下域は生じていません。

地盤沈下が沈静化してきたのは、昭和49年度以降揚水規制等諸施策の実施が功を奏したと考えられます。

地下水揚水量の地域別推移を前頁に示しました。昭和50年度には名古屋市と三河山間部を除く県下73市町村で2,460千m<sup>3</sup>/日でしたが、平成7年度の揚水量は1,180千m<sup>3</sup>/日となり、当時の約48%まで減少しました。

名古屋市でも、昭和48年度には529千m<sup>3</sup>/日であったものが平成7年度の揚水量は168千m<sup>3</sup>/日まで減少しています。

地下水揚水量を規制することにより、汲み上げ量が減少し、地下水位の回復とともに地盤沈下の進行が沈静化の傾向を示してきたのです。

## 【地下水汚染】

最近、地下水の水質に問題が生じてきています。いわゆる地下水汚染と言われるもので、トリクロロエチレン等の有害物質による人為的汚染が全国的にみられることが、米国シリコンバレーにおける地下水汚染問題の発生を契機として、昭和50年代後半に環境庁等により行われた調査により明らかになってきました。

愛知県では、平成7年度には全般的な地下水質を把握するための概況調査と同一地点における経年変化を把握するための定期モニタリング調査（定点）を105地点で実施しています。結果、幸い現在は人為的な汚染は確認されていません。

地下水は、一般に、一年を通して一定の温度に保たれ、水質は良好なため貴重な資源とされています。

しかし、地下を流れていることもあり、その量や分布、流れの方向、速さを始め、汚染のメカニズム、地盤沈下を生じさせない揚水量などまだまだ不明なことも多くあります。

今後は地下水の量と質の保全を図りながら、共有の資源として、有効に活用していく道を探ることが望まれますが、私たちはもっと地下水についても関心を持つことが必要だと思います。

地域別・調査担当機関別地下水質調査地点（平成6年度・7年度）

地 域	調査機関	概況調査	定期モニタリング調査（定点）
尾 張	愛知県	17	0
	建設省	0	5
	名古屋市	18	7
西三河	愛知県	18	0
	豊田市	15	0
東三河	愛知県	15	0
	豊橋市	10	0
計		93	12
		105	



## 日本人と自然(1)

佐藤国彦 (名古屋支部)

コンラート・ローレンツの本の中に、私達人間は、あまりにも理性的なものを過信して、動物とは大きく離れた存在と思っているのだが、実際には、人間の行動そのものにも動物的な要素が多いという意味のこと書いてある。動物的とはいっても決して感情的とか感覚的とかいうのではなく、例えば人間社会とネズミ社会の構造にすらかなりの共通点が認められるというような本質的なものである。とすれば、私達は今、技術の進歩とか生活様式の変化により、ますます自然から離れつつあるが、はたしてそれが幸せな結果に結び付くか疑問ではなかろうか。

そこで、私たちの祖先がどのように自然と接してきたかを振り返り、人間と自然との関わりについて改めて考えてみることも必要と思われるため、日本人が過去において自然をどのようにみていたか、古代、近世、近代における一面を探ってみた。

本 本 本 本 本

古事記によると、天地が初めて開けた時は、国がまだ若くて「海月(くらげ)なす漂へるとき、葦芽(あしな)の如く萌えあがる物によりて」原始の神が生まれたとある。天地創造という空想の世界であるが、その表現は具象的で、素朴である。古代の人々は、早春に萌えあがる葦の芽の生命力のようなものに、大きな驚きをもって見ていたことがうかがえる。驚くことを忘れた現代の人間とは異なって、彼等は自然を素直に眺め、その様々な現象に素直に驚き、また畏れや喜びを抱いたのであろう。

また、古代人は、彼等に意志があるように自然の物にも意志があると考えていた。自然の草木、動物、山野などとともに生命力とか

言葉など眼に見えぬものにまですべて神や霊があると信じた。もし、世の中に秩序がなくなれば、諸々の悪神が「さばえなす」すなわち蠅が群がるようにざわめくと思われた。自然の中に神がいるのではなく、自然のあらゆるものが神そのものであった。

常盤風土記の中に次のような話があるそうである。箭括麻多智(やはずまぢ)という者が、原野を開墾して田を作ろうとした時、その谷に棲んでいた蛇すなわちヤトの神が耕作を妨害した。そこで彼は、鉾を持ってヤトの神と戦い、山の入口に境界を設け、上は神の地、下は人の田と決めるとともに、社を作って祭りを行うことにしたという。さらに、この話を創造した後の人達にとっては、この箭括麻多智もまた神であり、このことは彼等の祖先の神が荒ぶる自然の神と争いながら人の生活の場を広げていったことになる。

このように、当時の人々にとって自然は、我々が考える以上に脅威であり、畏ろしいものであって、祟りをもたらす悪霊や物の怪に満ちた場所であったようである。そして、同時に自然は生活の糧を与えてくれる大切な存在でもあり、畏れつつも自然現象に対しては細かな観察もしていただろうし、彼等なりの方法で自然の本質も見据えていたであろう。人の住む場所と神や霊の棲む場所を区別して、それぞれ共存しようとすることは、自然の中に神や霊を持ち込むという呪術的なやり方ではあるが、自然と人間の関わりを見つめる眼は確かであったことを示している。

やがて大陸から儒学や仏教などの新しい文化が入り、それらの文化との接触や貴族など新しい知識階級の形成とともに、生活や考え方も変化していったが、その中で日本人的な

自然との接し方、自然との交流のあり方が作られていったように思われる。なお、万葉集の時代以降、中央集権の力が強まるとともに争いも多く、一般の民衆の生活はより苦しいものとなっていくが、新しい文化の浸透を受けながらも、呪術的な自然との接し方はその後も長く続いているようである。

万葉集の作品を見ると、当時の人々にとって、見ることに直覚することが真実であり、その中に自然は大きな位置を占めていたことが感じられる。万葉集巻14の東歌の「おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひは生ふるがに」とか有名な巻6の「ぬばたまの夜の更(ふ)けゆけば久木生ふる清き川原に地千鳥しば鳴く」(山部赤人)など自然を細やかに見ていることや、生活の中に自然との交わりが大きな位置を占めていたことがわかる。なお、これらの歌は、ただ自然を歌っただけでなく、自然にこと寄せて天皇家の繁栄など人の生活に影響を与えようとした呪術的意味ももっていたようである。

巻14の「春べさく藤の末(う)葉のうら安にさ寝(ぬ)る夜ぞなき子ろをし思(も)えば」とか巻16の雑歌に「わが門に榎(え)の実もり喫(は)む百千鳥千鳥は来れど君ぞ来まさぬ」のように、歌の主題は恋などであっても、自然はその中に生き生きとした背景として使われている。万葉集には、自然の情景がこのように表されている例が非常に多い。

また、万葉集には「見れども飽かぬ」という言葉がよく出てくる。巻1「河のへのつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は」にあるように、自然や草木などをよく眺め、なお飽かないという当時の人々の姿が出ている。古代心の自然を見る確かな眼は、こうして養われていることを、すぐに飽いてしまう現代人は思い直す必要があろう。

このように、古代人にとって、自然は彼等の心に深く生きていて、ちょうど彼等が自然からの産物でもって生活していたように、自然のいろいろな現象、事物を心の糧として、

かつ心の表現の道具としても使っていたのである。

日本の自然の特徴に四季の変化があり、これを楽しむことも古くから行われていた。万葉集でも春と秋はいずれが勝れるかという問いに答えた額田王の春秋の問答歌があり、これはその後も歌会などのテーマとして定家、西行の時代まで続けられている。万葉集でも巻8と巻10で春から冬へと季節による配列がなされており、後の古今集では全体が季節による配列となっているように、季節の変化に対する関心は昔から強かったのである。

万葉の植物という言葉もあるように、万葉集には多くの植物の名前が出てくるが、この傾向は徐々に失われ、鎌倉時代の新古今和歌集になると、花と紅葉が中心になって動植物の名前が出てくることは少なくなる。これは、歌が万葉集の時代には民衆のものでもあったのが、後に貴族だけのものになるとともに、実際に自然を見ながら歌うのではなく、歌会などで即興的に作ることが主流になったためではないかと思われる。

しかし、西行の「心なき身にもあわれはしらけり鳴(し)立つ沢の秋の夕暮」のように心の陰影と自然の情景を結び付けた名歌も誕生するようになる。それとともに、枕草子の有名な出だしの「春はあけぼの、やうやうしろくなりゆく、山ぎわすこしあかりて……」のように自然の情景を細やかに観察した作品も現れている。

この枕草子の秋の部分は、「秋は夕暮、夕日のさして山のはいとちかうなりたるに……」となっていて、秋は夕暮に風情があるとしている。西行の秋の夕暮などととも考えると、この秋の夕暮とか秋の月に風情を感じるの、日本人の繊細な感覚を表すものであろうが、この後一つのパターンとして定着してしまっている。古事記や万葉集にあったような、自然を生き生きと確かな眼でみる姿勢は、いつの間にか失われ、自然の一部を切り出して楽しむような形に変化してしまったのである。

## 事務局から

### 〔行事結果〕

#### ★ 研究会（街の中の観察指導—都市公園—）

〔期日〕平成9年7月12日 13:30～16:20

〔場所〕名古屋市鶴舞公園（出席7名）

都市公園のような場所でどんな観察会ができるかをテーマに、鶴舞公園で行う。

公会堂前の庭木にヘクソカズラ・カラスウリ・ヤブガラシなどのつる植物がついている。いろいろな樹木等の観察。雑草の観察。スギなどの梢の形による樹木の活力度の判断。雨による土砂の流れ方と、土の踏みつけ状況及び公園管理との関係。観察材料が少ないだけに、個々のものをより詳しく観察する効果もある。

参加者の意見としては、都市公園でもすべて同じような公園ばかりではつまらないので、地域の状況により何か工夫する必要があるのではないか、個性のある公園が望ましい。また、落ち葉などをすべて持ち出すのではなく、樹林内に置いておくなど管理上の工夫も必要ではないか。公園管理を市民参加で行うことが、個性のある公園作りにつながる。公園の自然度のようなのができないかなど。

### 〔調査のお願い〕

前回もお願いしましたが、NACS-Jからの「里山の自然調査」（協会の機関誌とともに会員には送られていると思います）及び環境庁の「ツバメの巣調査」（機関誌62号に様式）が実施されています。

調査の締切が近付いていますので、お忘れなきよう事務局等へお送りください。

#### （会員の動き）

##### 【加 入】

小野天下（名古屋支部）

465 名古屋市名東区八前 2-303

(052-773-3368)

##### 【脱 退】

鈴木利久（奥三河支部） 届

加藤丈治（知多支部） 届

##### 【住所変更】

長谷川信吾（尾張支部）

465 名古屋市名東区丁田町 58

コーボ青雲 302 (052-777-9787)

\* 会員名簿は、10月の講習会終了後作成します。

### 今後のふるさと（県委託）自然観察会

開催日	観察場所	時 間	集合場所	交 通	内 容
9. 9. 21 (日)	善師野 (犬山市)	9:30～ 14:00	善師野駅	名鉄広見線善師野駅	里山の自然を楽しもう (愛)
9. 10. 4 (日)	伊良湖岬 (渥美町)	10:00～ 14:30	道の駅クリスタルポルト前	名鉄バス伊良湖岬バス停そば	鳥の渡りと海岸の生物 (愛)
9. 10. 25 (日)	平和公園 (千種区)	9:30～ 14:00	新池そば 清風荘入口	地下鉄東山公園駅から徒歩15分	雑木林とはどんな所かな (愛)
9. 11. 9 (日)	くらがり溪谷 (額田町)	9:30～ 14:30	溪谷入口駐 車場	名鉄バスくらがり溪谷バス停そば	谷の秋を楽しもう (協)

## 水田にて

青野 崇史 (名古屋支部)

六月初旬に「ハマウツボが開花しているから…」と誘われて、日本海側の海岸へ出掛けました。その折に湿地にも案内され、そこで昔ながらの水田や放水路をみせてもらいました。



タニシがはい、イモリが泳ぎ、ヤゴもいて、歩けば成長途中のカエルやバッタがここかしこ飛びはねる環境です。デンジソウ、アカウキクサ、サンショウモ、ミツガシワ、トチカガミなどの植物も容易にみつかります。

ハマウツボも同様ですが、これらの植物は、愛知県では絶滅、絶滅寸前あるいは危急に瀕しています。

もともとデンジソウ、アカウキクサ、サンショウモなどは水田害草として、農家では決して歓迎されない雑草でしたが、人間の活動(改修された水路、耕地整理された水田、各種農薬の使用、生活污水の流入、…など)の結果、現在では保護の対象としてあげられています。

さりとて昔のような耕作に戻せというのは無茶な話ですし、不可能なことです。

ウサギ追いし彼の山／コブナ釣りし彼の川／というノスタルジックな唱歌でうたわれる里山は減少して行きます。地球上で我々は、何処から来て、これから何処へ行こうとしているのでしょうか。



## 自然との共生？

松岡 孝子 (西・東三河支部)

家の前に人工的に掘られた小さな川がある。「水無川」の命名のごとく雨が降らないと水の流れはない。上流は、コンクリートで固められた水路の上が親水公園として整備されている。家の前あたりの土手は土のままですが、道路との境にフェンスやガードレールがあること、ごみや空き缶の投げ捨てが多いこと、また散歩する犬のふんが散乱しているため、入る人はほとんどいない。おかげで土手の部分には、様々な雑草が生い茂っている。その雑草をみても、春にはセイヨウカラシナがいっせいに咲き乱れ、夏に近づくと水が流れる付近にミソソバが、次にギシギシとイネ科の雑草が水辺から棲み分けて生えている。そして、年に2から3度草刈りの手が入るまで生存競争が続けられている。

このあたりもしばらくすると親水公園として整備される予定になっている。景観的にはおしやれにみえるが、実際にはコンクリートで囲まれた水路となり、生物の数は少なくなる。わたしは、たくさんの生き物がすめて人が入れるような川にしたい。衛生面や安全面からの問題点も多いが、これらは人間側の努力で改善可能である。自然な状態が少しでも残る現状がいいのか、親水公園として整備された方がいいのか、現状のままでは何ともいえない。ただ、最近聞きかじった言葉であるが、ビオトープの考え方を公園づくりに利用できないものか。人間が生きていく上で、「自然と共生していくこと」は理想である。愛知万博は「自然との共生」をめざしている。地域にとって参考となる万博であって欲しい。



# ＝(支部だより)＝＝＝＝＝＝名古屋支部＝

名古屋支部後援の観察会を毎月開催しています。どなたでも、参加を歓迎します。  
都合により、開催日・時間等が変更される場合もあります。

参加の際は、念のため、各連絡先へ問い合わせをお願い致します。

開催日	観察場所	連絡先
第1日曜日	大森湿地(守山区)	加藤 純子(052-711-2469) 塚本 和義(052-991-2668)
第2土曜日	猪高緑地(名東区)	布目 均(052-771-0396) 堀田 守(052-774-1196)
第2日曜日	大高緑地(緑区)	岩崎 昇一(0533-68-0201) 山田 千尋(0562-97-6857)
第3日曜日	東山(千種区)	滝田 久憲(052-782-2663)
第4日曜日	相生山緑地(天白区)	近藤記美子(052-822-7460) 鈴木ひろ子(052-822-3484)

(1997.7月現在)

## 活動予定

- 8月 3(日) 9:30 大森湿地自然観察会－斜面に湿地  
 10(日) 9:30 大高緑地－－－－－－セミ・クワガタムシ・カブトムシ  
 17(日) 9:30 東山－－－－－  
 20(水) 18:30 室内例会<市教育館1研>－  
                   ①10/26(県委託)平和公園自然観察会のコース提示・検討  
                   ②会員の研修報告<できれば、簡単な資料を用意>  
 24(日) 18:30 相生山－－－－－ナイト・ウォッチング
- 9月 7(日) 9:30 大森湿地－－－－－シラタマホシクサの観察  
 14(日) 9:30 大高緑地－－－－－鳴く虫とトンボ、バッタ  
 15(月・祝) 9:30 猪高緑地－－－－－  
 17(水) 18:30 室内例会<8研>－①身近にあるシダの話(犬飼 清氏)  
                   ②10/26(県委託)平和公園自然観察会の実施計画  
 21(日) 9:30 東山－－－－－  
 23(火・祝)(協)研究会－市街地の自然観察①  
 28(日) 9:30 相生山－－－－－鳴く虫の舞台衣裳を見てみよう

## —自然観察会実施結果—

6/8 (日) 東浦地区

9時に於大公園に集合。60名集まる。明徳寺川にタモ、バケツを持って入る。事前に魚を採る要領を教える。川へ初めて入る子、母親が頑張るグループ、昆虫たもてで魚を採る子、流れに足をとられて転ぶ子、イトトンボを追う子、たもを流して泣く子などで川の中は賑やかでした。

アメリカザリガニ・ドジョウ・コイ・ナマズ・ブルーギル・ハゼ・ヤゴ・マツモムシ・アメンボ・サカマキガイ等

〔田中、伊藤、加藤、村瀬、竹内、皆川〕

6/14 (土) 東海地区

東海市熱田神社に9時集合。境内で受付。40名。横須賀新川に鉄製の梯子で降りる。幼子を背負ったり抱いたりする。草むら、石ころ、土塊あり。ざばざば歩き、カニ・カイ・カメ・ザリガニ等を素早く捕らえる。橋の上では母親が3人退屈そうにしている。

ヨシノボリ・ウキゴリ・ドンコ・ベンケイガニ・マシジミ・ヤゴ・ウナギ・タニシ・セイゴ・ブラックバス・マハゼ・スズキ・アメリカザリガニ・イトトンボ・トノサマガエル

田圃にカブトエビ

〔石原、岩崎、加藤、榊原(靖)、平松、皆川、村井、村瀬、吉川、吉村〕

7/6 (日) 常滑地区

常滑市鬼崎海岸で漂流物調査実施。参加者50名。挨拶、日程説明の後海岸へ移動した。グループ毎にかなり漂着物を集める。暑い日だったので、泳ぐ子がいた。11時ころあつまり、取れたものの説明をする。昼過ぎに解散したが、指導員は1時頃まで活躍し、次回の打ち合わせをする。

〔大橋・加藤、榊原(靖)、竹内、中井(康)、中井(三)、降幡、皆川、村瀬、吉川〕

7/20 (日) 知多地区

知多市地域センター主催の「海の生き物」観察会。50名参加。暑い日でしたが風があった。

コウボウムギ・オカヒジキ・ケフサイソガニ・コブシガニ・オサガニ・ヤマトオサガニ・ヒラオサガニ・コメツキガニ・マカキ・ムラサキイガイ・カレイ・アナゴ・イボニシ・アサリ・シオフキ・エイ・コチ・アナジャコ・テッポウエビ・スナモグリ・タテジマイソギンチャク・ツメタガイ・ナミマガシワ・ゴカイ・アカニシ・サルボウガイ・シマメノフネガイ・ヒラムシ・フナムシ・アナアオサ

〔相羽、加藤、高橋、降幡、皆川、山田〕

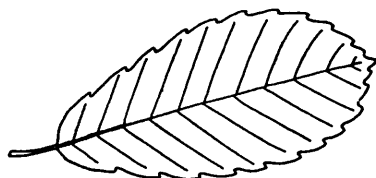
7/21 (月) 知多地区

常滑市と知多市の境に流れる矢田川で観察会を実施。61名参加。ベビーカー3台、タモ持ち多数、母親1人に子供5人などいろいろな組み合わせでした。川へ入るのが大変、抜き足差し足で歩く人、川へどんどん行くグループ、「メダカ・メダカ・オタマ・オタマ」と追う子。1時間ばかり遊び、橋の下に集合し説明した。

大人半分は無関心で話ばかりしていた。

イシマキガイ・アシハラガニ・チゴガニ・コメツキガニ・アカテガニモクズガニ・ヤマトオサガニ・アメリカザリガニ・ウナギ・チチブ・セイゴ・ボラ・ハゼ・シジミ・スナモグリ・トノサマガエルなど。

〔近藤(記)、相羽、加藤、高橋、中井(三)、中井(康)、降幡、皆川、村瀬〕



## 行 事 案 内

### ☆基礎研修会「地形・地質を読もう」(室内)

期日：平成9年8月24日(日) 13:00～16:00 場所：名古屋市公会堂

・第三紀、第四紀の愛知県の地形地質の動き、地質を観察するポイント。

講師：吉村曉夫

### ☆基礎研修会「草原の昆虫と鳴く虫」(室内と野外)

期日：平成9年9月15日(休) 14:00～17:00 場所：送付文参照

・身近な草原にどんな昆虫がいるか、バッタに強くなる、鳴くの見分け方等。

講師：水野利彦

### ☆研究会「街の中の自然観察②」(都市河川の観察)

期日：平成9年9月23日(休)

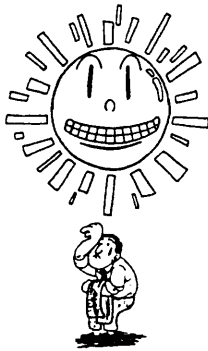
場所：山崎川(集合「瑞穂青年の家」前、地下鉄「新瑞橋」駅から徒歩5分)

・都市河川の役割、都市河川の観察ポイント、これからの都市河川を考える。

★問合せ先：いずれも佐藤(☎05617-3-5674)まで

### ✽ 編集後記 ✽

今年は台風の当たり年だ  
そうです。台風9号の上陸  
で早くも三つ目。例年です  
と年間2.8個だそうですか  
ら、本格的な台風シーズン  
を待たずに3個はやはり異  
常でしょうか。これは赤道  
付近の温度の高い海水が東  
の方に移動しているエルニーニョ現象の影響で  
す。お天気や気象に目を向けるのも、自然に目  
を向けることと同じだと思います。季節の移り  
変わりなどの発見は、生活をより楽しくさせて  
くれます。まだまだ暑い日が続きますが、風邪  
などひかないようご活躍ください。(近藤)



### ＝ 目 次 ＝

アンケート③ 自然との共生 .....	1
岐阜舟伏山の観察と	
面の木峠ブナ林を訪ねて .....	3
ヒノキ、マツ、フジ .....	4
私の環境への思い .....	5
地下水はだれのものか .....	7
日本人と自然(1) .....	9
事務局から .....	11
会員紹介 .....	12
青野崇史、松岡孝子	
支部だより .....	13
(名古屋、知多)	